

札幌地域における 埋蔵文化財の保護について

大 場 利 夫

埋蔵文化財の保護について

現在、土中深く埋没している、いわゆる埋蔵文化財とは、われわれの祖先の人達が古くからこの地に住んで生活し、その中で残した生活の跡で、いわば人間の過去の記念物であり、今日われわれに伝えられたかけがえない文化的遺産といえる。

もともと歴史と文化は、忽然と発生し成立したのではなく、古い祖先からの蓄積によるものであるというまでもない。ことに文字を使用する以前の歴史、ならびに文化の解明は、埋没している遺跡の学術的な発掘調査によって、ただしく理解すること以外にはない。

埋蔵文化財は一たん破壊されると、再び復元することのできない性質のものであ

る。したがって今日われわれに残された遺跡は、学術資料として学問の活用から離れて破壊され、そして失われていくことは、研究者のみの損失にとどまらず、われわれ一同の損失であることはいうまでもない。ここに埋蔵文化財、すなわち遺跡のもつ意義とその価値とをわれわれはよく認識し、そして正しく活用し、さらにこれを保護して後世に伝える義務があろう。

昭和二十五年五月三十日、法律第二一四号で「文化財保護法」が制定されたが、この法令は関係者以外にはあまり知られていないので、ここに簡単に紹介すると、本法は第七章ならびに附則をふくめて百三十条の規約で、総則第一章第一条には「この法

律は文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」と記され、第二条には文化財の定義として、一、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、考古資料、その他の「有形文化財」。二、演劇、音楽、工芸技術、その他の「無形文化財」。三、衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗習慣およびこれに用いられる衣服、器具、家屋、その他の「民俗資料」。四、貝塚か、古墳、都城跡、城跡、旧宅、その他の遺跡で、わが国にとって歴史上または学術上価値の高いもの、庭園、橋りょう、峡谷、海浜、山岳、その他の名勝地ならびに動物、植物および地質鉱物で、わが国にとって学術上価値の高い、いわゆる「記念物」と、文化財の種類が区分されている。

なお貝塚か、古墳など考古資料を包蔵する土地を發掘して埋藏物である文化財（埋藏文化財）について調査をしようとする場合のためには、第四章第五十七条から六十八条までの項目において、遺跡、遺物の保護ならびにとり扱いについての細目が定められている。

最近宅地ならびに工場用地の造成、道路建設、農地の改善など、土地の開発が全国的に急速に進み、これによって意識的、あ

るいは無意識的に埋藏文化財が急激に破壊されている。これらの工事に伴つて遺跡が發見された場合には、やむをえぬ処置として「緊急發掘」が行なわれている。緊急發掘は必ずしも文化財保護の本旨にそつた方法ではないので、功罪半ばするがこれによつて従来まったく予想もつかなかった遺跡や遺物が、つぎつぎと發見されていることも事実である。

開發の盛んな現状に対処して、埋藏文化財を保護するためには、文化財保護担当者

① 札幌市およびその周辺

札幌市およびその周辺地域は海、河川に依存した漁撈、あるいは狩猟などの採集經濟を主とした段階の先住民族の生活条件には、地理的に見ても必ずしも好適の地ではなかつたためか、遺跡の数は比較的すくない。ことに現在、札幌市の中心部をなしている地域は低地帯で、アイヌ語ではサツ・ポロ・ベツ（乾いた大きな川）といわれていたところで、昔時は好んで人間が住めるような状態にはなかつたことを示している。しかし現在の中心部の西北に当り、低

とはいうまでもない。担当者は常に基本的な対策として、第一には埋藏文化財を包蔵する土地が、どこにどれだけ存在しているかを調査し、広く一般に認識させ、その保護に一般の人びとが協力してくれるよう努力すること。第二にはこれらの文化財のうちで、特に重要なものは、文化財保護法や地方公共団体の条例を活用して、破壊前に指定保護することが望まれるのである。なお土中に埋没していて、未確認の遺跡が存在していることも、常に考慮に入れておくことも肝要であろう。

札幌地域における遺跡分布の現況

位段丘をなしている發寒川流域地帯ならびに北部の丘珠と、創成川に沿つた低位段丘地帯および円山北町―円山公園と藻岩山麓地帯、市の中心部の南部から東部にかけての平岸、真駒内、月寒―西岡を結ぶ丘陵地帯で河川の流域、さらに東南部大谷地附近には小規模ながら先住民族の遺跡が、かつての札幌低地帯といわれた、現在の市街中心部をとり囲むように、分布して存在している。

札幌市および、その周辺の遺跡については大正年間、すでに河野常吉氏によって調査されているが、学術的な目的によって踏

査がなされたのは昭和の初年で、新岡武彦氏（註1）、河野広道博士（註2）、高倉新一郎博士（註3）らによって發寒ならびに發寒河畔の遺跡の調査が行なわれている。その後同十二年、後藤寿一氏（註4）も札幌市周辺の遺跡の分布調査を行ない、それぞれ学会誌に報告をなしている。なお、近年における主要な調査と報告書をあげると、昭和二十七年北海道大学構内において堅穴住居址群が發見され、北海道大学北方文化研究室が主体になり、七ヨの堅穴住居址について發掘調査を行なっている（註5）。

その後昭和四十一年には、北海道教育大学札幌分校考古学研究室の諸氏によって、發寒小学校裏の遺跡が調査され、出土した遺物の整理報告がなされている（註6）。また同三十九年、平岸坊子山遺跡の發掘調査を、大場利夫が担当して行なつたが、その結果について同四十一年、教育大学の畑宏明氏が詳細な報告を行なっている（註7）。また同四十二年三月に、北海道大学文学部北方文化研究施設の菊池俊彦氏によって、平岸天神山遺跡から出土した土器の整理報告がなされている（註8）。

なお、同四十三年十月には教育大学の諸氏の協同作業として、札幌市周辺における遺跡を中心にして先史地理学的に考察された報告が發表されたが、本論考は札幌地方

に存在する遺跡についての総合的な論文として注目されるものがある(註9)。また同四十四年九月、郷土誌「ひらぎし」に「ピラ・ケシ」と題した随筆で、大場利夫が平岸地域から発見された遺物について述べたものがある(註10)。

以上にあげた発掘調査ならびに報文が、札幌市ならびにその周辺における遺跡および遺物についての主要なものである。なお北海道教育委員会社会教育課文化財保護係が、今日までの報文を基礎にして全道の遺跡分布図を文部省文化庁文化財保護部記念物係に提出したが、文化庁では昭和四十三年に、これをまとめて地図を作製し、「遺跡地図」として刊行している(註11)。これによれば、札幌市およびその周辺に存在が認められた遺跡の数は約八十数カ所にもおよんでいるが、今回われわれが踏査した限りでは、遺跡として正式に保護されているものは、北海道大植物園内に残存している縄文文化期の竅穴遺跡のみで、その他はまったく放置された状態で、遺跡として確認することもむずかしい状態である。しかし幸いに、縄文文化中期の年代の平岸天神山遺跡の一部と、縄文文化早期-晩期にわたる年代の遺跡が、平岸坊子山附近の奥内氏宅内に破壊されずに残存している。

札幌市およびその周辺に存在する遺跡の

形成年代については、おのおのの遺跡は一般に小規模であるにもかかわらず、縄文文化初期の早期の年代から始まり、同前期、同中期、同後期、同晩期ならびにそれ以降の年代の縄文文化期、そして擦文文化期と、縄文文化期、およびそれ以降の各年代

におよんでおり、およそいまから六、七千年前から一千年前までの約五、六千年の長い期間にわたって、先住民族が生活していたことが明らかである(「先史文化の変遷」参照)。なお昭和三十三年八月、札幌市西高等学校郷土研究部刊行の「郷土の科学」二十一号、ならびに同三十四年十二月札幌市光星高等学校社会科学研究部発表の「黒曜石」十一月号によると、札幌市白石および同周辺において、先土器文化期の遺物と考えられる石刃(ブレード)を発見したと報告している。これがもし确实だとすれば、札幌市周辺には縄文文化期よりも一層古い年代の遺跡が存在していた可能性が強い。

なお、札幌市およびその周辺をふくめたいわゆる石狩低地帯で発見された土器、石器の遺物から推察される特徴は、北海道南部に分布の多い、いわば南部的なもの、北海道北部に分布の多い、いわば北方的なものとの、両文化の遺物が併存していることと、さらに両者の接触によって生じたものと考えられる、融合形式の土器文化も存

先史文化の変遷

本州	北海道	推定年代
先土器文化	先土器文化(旧石器文化)	B.C.10,000年
縄文文化	縄文文化	B.C. 5,000年
弥生文化	縄文文化(早期・中期・晩期)	2,000年(西暦0年)
古墳文化	縄文文化(後期)	A.D. 1,000年
奈良文化	縄文文化(オホツク文化)	
平安文化	縄文文化	
室町文化	縄文文化	
江戸文化	縄文文化	
明治文化	縄文文化	
大正文化	縄文文化	
昭和前期文化	縄文文化	
昭和後期文化	縄文文化	

在していることなど、本域での特色といえる。

があるが、その他の遺構は土中に埋没しており、地上からは判別することがむずかしい。また現在、札幌市およびその周辺より

出土した土器および石器は、北海道大学農学部附属博物館、同文学部北方文化研究所、同医学部解剖学教室、北海道教育大学札幌分校、札幌市時計台資料室、札幌市立平岸公民館に保管され、時計台資料室ならびに平岸公民館では、その一部を展示している。

(註1) 新岡武彦 札幌市外月寒遺物散布

地 究古 一ノ三 昭和五年六月
 (註2) 河野広道 発寒村の遺跡発掘記
 蝦夷往来 一〇号 昭和八年六月
 (註3) 高倉新一郎 発寒の遺跡について
 蝦夷往来 一〇号 昭和八年六月
 (註4) 後藤寿一 札幌市及び其附近の遺跡遺物の二三について 考古学雑誌 二十七卷九号 昭和十二年九月

(註5) 北大調査団 北大遺跡について 北方文化研究報告一〇輯 昭和三十年三月
 (註6) 岩崎隆人・三室俊昭 札幌市発寒小学校裏遺跡 北海道の文化 一〇号 昭和四十一年三月
 (註7) 畑宏明 札幌市平岸坊子山遺跡アイヌ・モシリ 二号 昭和四十一年十月
 (註8) 菊池俊彦 札幌市平岸天神山出土の土器について 北海道考古学 三輯 昭和四十二年三月
 (註9) 岩崎隆人・宇田川洋・加藤晋平・河野本道 札幌扇状地における遺跡の先史地理学的考察 アイヌ・モシリ 三号 昭和四十三年十月
 (註10) 大場利夫 ピラ・ケシ 郷土誌ひらぎし 昭和四十四年九月
 (註11) 文化財保護委員会 全国遺跡地図(北海道) 昭和四十三年三月

② 石狩町、手稲町およびその周辺

石狩町ならびに手稲町は石狩湾に臨み、日本海に発した石狩川の河口流域を占めて

いる。したがって地理的には漁撈、および狩猟に最も適した地域であるので、かつての時代には、おそらくかなり多くの先住民が生活していたことと推察される。それにもかかわらず、本地域内ではじゅうぶんな調査が行なわれていないので、大遺跡はまだ発見されていない。現在判明している範囲では、石狩川の南岸でその支流の発寒川の北岸の低位段丘上に分布が見られる。すなわち紅葉山、砂山を中心として、石狩町花畔から手稲町にかけた段丘上に散発的に遺跡が発見されている。

また石狩川の東岸流域地帯で、石狩低地帯より高位段丘に移行する地帯、すなわち厚田町、聚富村知津狩より石狩町高岡を経て当別町にいたるまでの地域、ことに聚富町、高岡村伊達山には、札幌市周辺の高位段丘上に見られるような、縄文文化中期の遺跡が分布している。また、ところによっては発寒川北岸地帯と同年代か、それ以降のすなわち縄文文化後期以降の年代の遺跡も存在する。

石狩町、手稲町およびその周辺に存在する遺跡については、昭和初年に河野広道博士(註12)、高倉新一郎博士(註13)らによって遺跡の踏査が行なわれているが、本格的な発掘調査はなされなかった。しかし近年に入って、北海道教育大学札幌分校考古学

研究室、札幌市西高等学校郷土研究部(註14)、同光星高等学校郷土研究部の諸氏および高木憲了・上野秀一・倉谷泰賢氏ら(註15)によって、遺跡の分布調査が活発に行なわれて、それぞれ調査報告書が公表されたので、次第に遺跡の状態が明らかになってきた。

昭和四十三年七月に行なわれた紅葉山遺跡は、発寒川北岸標高五〜一〇mの低位段丘上に位置し、行政上は花畔村と樽川村にまたがった地域に存在している。本遺跡は藤本英夫氏らを中心とした調査団によって発掘が行なわれたが、続縄文文化期の墳墓であることが明らかにされた(註16)。また石狩町内では、旧石狩川に沿った南、北、西の各域の河岸すなわち八幡、矢白場、花畔など数カ所からも、土器、石器などの遺物が発見されている。

手稲町手稲遺跡は、前述した発寒川北岸に発達した砂丘上にある紅葉山遺跡と連続した地帯で、砂山(地名)に位置している。昭和二十八年、砂利採集中に発見された遺跡で、同二十九年七月、大場利夫と石川徹氏が発掘調査を行なったが、土器、石器などの資料を多数採集することができ、縄文文化後期の土器文化の様相が明らかにされた(註17)。その後、本地域については愛下淳、石川徹氏ら(註18)がさらに調査を重

ねている。

厚田町地域では、日本海岸の知津狩から聚富、石狩町高岡に至る石狩低地帯一帯とこれに接する低位段丘、または中段段丘を形成する地域一帯の石狩川北岸の段丘上には遺跡が存在している。なお本地域、すなわち西両面した丘陵地帯および河川の流域には、既発見の遺跡のほかかなり多くの遺跡が分布していることが、北海道教育大学札幌分校の諸氏(註19)の努力によって明らかになりつつある。

当別町地域では、厚田町に隣接した丘陵の南東面した段丘上で、しかも篠津川の流域に当る地帯に遺跡が存在していることが北海道教育大学札幌分校の諸氏の調査によって明らかになっている(註20)。これらの中で、昭和三十九年と同四十年に行なわれた当別町伊達山遺跡の発掘調査報告書によれば、当別町地帯の高位段丘上には縄文文化中期の年代の遺跡が、主体をなして存在していることが述べられている。(註21)さらに低位段丘上には隣接地と同様に、縄文文化後期以降の年代の遺跡の存在が認められている。なお本地域の先史地理的な考察については、先にあげた岩崎隆人氏らの共同研究による、すぐれた報告書(註22)がある。

石狩町、手稲町、厚田町、当別町に存在

する遺跡についての諸報告書によって判断すると、本地域内で現在までに判明している遺跡は、五十数カ所を算えているが、正式に保護処置のとられている遺跡は皆無である。なお前述したごとく、各地帯とも低位、中段の段丘上には縄文文化中期の遺跡が主体をなして存在し、低地帯の砂丘上には縄文文化後―晩期と、それ以降の続縄文文化期、擦文文化期の遺跡が存在している。したがって本地域でも札幌市およびその周辺地帯と同様に、かなりの長年月にわたって先住民が住んでいたことはいうまでもない(「先史文化の変遷」参照)。

現在までに判明している遺跡の種類は、堅穴住居址、墳墓などであるが、本地域は海岸地帯なので貝塚の存在も考えられるので、今後の調査に期待がもたれる。また今日までに発見された遺跡は、紅葉山・手稲を除いては、いずれも小規模の遺跡のみで大規模のものは発見されていないが、地理的条件ならびに生活条件などから推察すれば、大規模の遺跡の存在が可能であるのでこの点についても今後の調査に期待されるものがある。なお、本地域から発見採集された遺物は、北海道教育大学札幌分校ならびに石狩町、手稲町、厚田町、当別町の各教育委員会所属の資料室に保管され、展示されている。

(註12) 註2に同じ

(註13) 註3に同じ

(註14) 札幌市西高等学校郷土研究部 紅葉山砂丘における縄文期の遺跡 北海道文化 十四号 昭和四十三年三月。同石狩町花畔上花遺跡発掘調査概報 昭和四十三年一月

(註15) 高木憲一・上野秀一 石狩砂丘遺跡の縄文中期土器編年 歴研月報 十四ノ七五 昭和四十二年。上野秀一 石狩砂丘遺跡について 歴研月報 十五ノ八一 昭和四十三年。倉谷泰賢 石狩町紅葉山三十三号遺跡概報 北海道文化 十四号 昭和四十三年三月

(註16) 藤本英夫・木村英明 紅葉山遺跡 昭和四十三年十二月

(註17) 大場利夫・石川徹 手稲遺跡 昭和三十一年五月

(註18) 愛下淳 手稲遺跡調査報告 郷土の今昔 五号 昭和三十三年五月。石川徹 札幌都手稲町砂丘出土の土器について 北海道考古学 三輯 昭和四十二年三月

(註19) 宇田川洋 厚田村聚富における発掘調査 昭和三十九年十月。岩崎隆人 石狩厚田村聚富の遺跡と遺物 釧路古代文化 六号 昭和三十九年十月。岩崎隆人・宇田川洋 厚田郡厚田村字古潭出土の土器 釧路古代文化 八号 昭和四十年十一月。宇田川洋 厚田村聚富土上遺跡発掘概報 アイヌ・モシリ 一号 昭和四十年十二月

(註20) 近田正人 石狩郡当別町遺跡調査

報告 郷土の今昔 五号 昭和二十八年四月。岩崎隆人 石狩郡当別町伊達山遺跡の資料 釧路博物館新聞 一六三—一六五 昭和四十年十月。岩崎隆人 石狩郡当別町樺戸通り出土の土器 釧路古代文化 八号 昭和四十年十一月

(註21) 岩崎隆人・三室俊昭・室田彰則 伊達山遺跡 昭和四十五年三月
(註22) 註9に同じ

③ 江別市（江別・野幌）およびその周辺

江別市は札幌市の東北方一〇kmの地点にあつて札幌に隣接し、さらに北方では石狩町に隣接するが、地理的には日本海に発した石狩川の上流南岸地帯に位置している。本地域は石狩地帯と同様に、先住民族の生活には河川による漁撈と、平原地帯での狩猟に適した立地を示している。また本地帯は、古代に北海道を南北に区分していた、いわゆる石狩低地帯という自然がつくった境界線上の中心部に所在し、当時本地帯を境に南部と北部に居住していた先住民族の交易の場所となつたものようである。遺跡が石狩川の本流、支流のいたるところに群在し本市の全域におよんでいる。したがつて本地域には、各年代にわたるかなり大規模の遺跡が存在しており、北海道でも有数の遺跡地帯となつてゐる。しかし、市の発展

に伴つて破壊された遺跡も多いが、野幌地帯の遺跡は幸いにも緑地帯の中に遺跡公園として保護されている。

江別市およびその周辺に存在する遺跡については、札幌市と同様にすでに昭和初年から知られてゐた。しかも本地域は、遺跡の分布が広く種類も多岐にわたつてゐることによつて、研究者も積極的に発掘調査を行なつたのでその成果も多い。すなわち河野広道博士、名取武光氏、後藤寿一氏らの北海道の研究者を始め、八幡一郎氏、喜田貞吉博士ら中央学会の研究者も参加して、本地帯の遺跡ことに墳墓について発掘調査が重ねられ、各人によつて多くの報告書が発表されている(註23)。なお、昭和初年に行なわれた墳墓の調査結果では、縄文文化期と擦文文化期に形成されたものが大部分を占めてゐる(註24)。

昭和十年以降、本地域の遺跡の発掘調査が一時中断された。また太平洋戦争中に遺跡地帯を整理して飛行場を使用されることになり、多くの遺跡が破壊された。さらに終戦後は工場用地として整理がつづけられた。こうした破壊の状況を憂慮した河野広道博士は、北海道教育大学札幌分校の学生諸君を指導して、破壊と併行して調査を行なつた。ことに対雁子山は大遺跡で、縄文文化早期の年代から、同前期、同中期、

同後期、同晩期の各期を経て、縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期と、先史文化変遷の状態が明瞭に把握される重要な遺跡であつたことが、本遺跡調査の概報ならびに報告書で明らかである(註25)。

近年、江別市街地の西隣野幌大麻に団地が造成され、それに伴ひ遺跡が発見されたが、その一部については破壊に先だつて緊急発掘を行なつて記録を残し、遺物を採集してゐる。なおこれを機会に市教育委員会は、遺跡分布図を作製して団地造成上やむをえぬ部分については、事前に発掘調査を行なつて記録を残すといった態勢をつくつた。その後も数回の緊急調査が行なわれたが、それらには大場利夫、君尹彦氏、中村齊氏らが出動して発掘調査を行なつた。調査報告書は目下製作中であるが、それらの調査概報は、その都度刊行されてゐる(註26)。なお、江別市全域における遺跡の発掘調査の歴史、遺跡の分布状態、遺物の詳細については、昭和四十五年三月に刊行された江別市史の「先史時代」に、河野広道博士の遺志を継いだ河野本道氏によつて詳しく述べられてゐる。それによると、江別市内に存在する遺跡の数は四十六カ所を算えてゐる(註27)。

前述した研究者諸氏の今日までの調査によつても明らかであるが、江別市には縄文

文化の最初の年代である早期から、同前期
同中期、同後期、同晩期の全期間と、続縄
文文化期、擦文文化期と、先史時代の各年
代にわたる遺跡が存在している（「先史文
化の変遷」参照）。ことに、続縄文文化期
―擦文文化期にかけた墳墓群が存在してい
ること、その墳墓からは土器、石器の他に
年代の明瞭な竊手刀などの金属器が出土し
ていることなどで、本州の古代文化との対
比が可能になり、研究上重要な資料となっ
ている。なおこれらの資料は、江別市教育
委員会所属の資料室に収蔵され、一部は展
示されている。

江別市の周辺地域に当る岩見沢市、北村
地帯にも遺跡の存在が認められるが、これ
らは江別市で発見されたような大規模なも
のではない。今日までに明らか遺跡につ
いては、岩見沢市史の「先史時代」(註28)、
北村村史の「古代史」(註29)にそれぞれ詳
しく述べられている。また夕張川の北岸地
帯に所在する月形町、奈井江町、栗沢町お
よび栗山町に分布する遺跡についても、近
年調査が行なわれている。すなわち月形町
で発見した石器については、昭和三十四年
札幌西高等学校郷土研究部による報告書が
あり(註30)、奈井江町発見の石器について
は、同四十三年野村崇氏の報告書がある
(註31)。

また栗沢町由良から出土した土器につ
いては、同三十四年川野榮三郎氏の報告書が
見られる(註32)。ついで昭和三十九年に札
幌市光星高等学校郷土研究部が、栗沢町加
茂川遺跡を調査して、その概要を報告して
いる(註33)。つづいて同年、河野本道・本
田栄作氏によって、栗沢町の全域が調査さ
れ、十数カ所の遺跡を確認して、その概要
をまとめて報告している(註34)。また翌四
十年と四十三年に河野広道博士を中心に、
北海道教育大学札幌分校の諸氏が前に行な
った加茂川遺跡の発掘調査の報告書も刊行
されている(註35)。栗山町に存在する遺跡
については、昭和三十九年野村崇氏が中心
になって、町内全域の遺跡が踏査され二十
五カ所の遺跡が確認されており、詳細は報
告書にまとめられている(註36)。なお野村
崇氏は、同四十二年に夕張東高等学校郷土
研究部刊行の部報にも、栗山町に存在する
著明な遺跡について述べている(註37)。

江別市およびその周辺の月形町、奈井江
町、栗沢町、栗山町に存在する遺跡につ
いての研究者各氏の報告書によって推察すれ
ば、本地域の高位、中位の段丘上には、縄
文文化早期、同前期、同中期の遺跡が分布
し、低地帯には縄文文化後期―晩期とそれ
以降の年代の続縄文文化期、擦文文化期の
遺跡が分布していることが明らかである。

また丘陵地帯の一部から、先土器文化の
年代の石器と思われる資料が出土しており
本地域には縄文文化以前の石器文化が存在
していたようにも考えられる。したがって
本地域には札幌、石狩地域ではまだ確認で
きない年代の、すなわち先土器文化の年代
から先住民族が居住していたことがほぼ明
らかである。

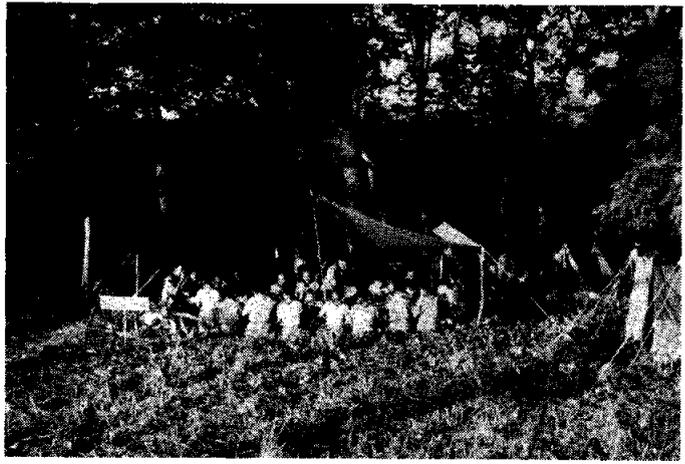
江別市およびその周辺で現在までに判明
している遺跡の種類は、竅穴住居址、各年
代の墳墓(竅穴式墳墓、盛土墳墓など)な
どがある。ことに江別市に存在している遺
跡は、大規模で住居址の分布の範囲も広
い。江別本町附近に存在していた遺跡はそ
の大部分がすでに破壊されたが、隣接する
野幌大麻附近に存在する遺跡は、幸い一部
が保護されて残存している。なお本地域か
ら発掘または採集された遺物は、北海道教
育大学札幌分校、江別市公民館ならびに各
町教育委員会所管の資料室に保管され、展
示されている。

(註23) 後藤寿一 古墳の発掘について
蝦夷往来 八号 昭和七年七月。八幡一郎
北海道の古墳墓 人類学雑誌 四十七巻九
号 昭和七年九月。喜田貞吉 北海道にお
ける所謂「古墳」について 蝦夷往来 九
号 昭和八年一月。河野広道 北海道江別
町円形竅穴式墳墓発見の石器時代人一頭骨
とその埋葬状態 人類学雑誌 四十八巻六

号 昭和八年六月。名取武光 北海道江別
兵村に於る竅穴式墳墓の発掘報告 考古
学雑誌 二十三巻十一号 昭和八年十一月。
河野広道 北海道の古墳様墳墓について
考古学雑誌 二十四巻二号 昭和九年二月。
後藤寿一 北海道における古墳出土遺物の
研究 考古学雑誌 二十四巻三号 昭和九
年三月。河野広道 北海道江別町発見の土
甎様土製品 蝦夷往来 十三号 昭和九年
十月。後藤寿一 石狩国江別町の竅穴住居
址について 考古学雑誌 二十五巻二号
昭和十年二月。後藤寿一 石狩国江別町に
おける竅穴様墳墓について 考古学雑誌
二十五巻五号 昭和十年五月。後藤寿一
北海道出土の石器の一部について 人類学
雑誌 九十一巻五号 昭和十年九月

(註24) 高山契 北海道江別町の遺跡及び
竅穴様墳墓発掘報告 古今 六 昭和二十
四年十月

(註25) 高橋悦郎 江別市対雁坊子山遺跡
の発掘略報 一―三 ウタリ 三号 昭和
三十五年十月―十二月。同人 同題 四
アイヌ・モンリ 五・六号 昭和三十六年
三月。山口敏 江別市対雁坊子山遺跡出土
人骨 人類学雑誌 七十一巻二号 昭和三十
八年十月
(註26) 江別市教育委員会 江別市高砂遺
跡第一次調査概要 昭和三十九年十一月。
同 江別市大麻第V遺跡調査概要 昭和四
十年九月。同 江別市古豊平川遺跡調査概
報 昭和四十年九月。同 江別市高砂遺跡



恵庭市公園遺跡

(自然環境と調和して昔のままの姿で保護されている好例)

空知地方史研究 二号 昭和四十三年三月

(註32) 川野栄三郎 栗沢町由良遺跡B地点出土の甗形土器について 黒曜石 九号 昭和三十四年十月。札幌市西高等学校郷土研究部 月形町出土の石器について 黒曜石 十号 昭和三十四年十月

(註33) 札幌市光星高等学校郷土研究部 加茂川遺跡 いぶつ二号 昭和三十九年三月

(註34) 河野本道・本田栄作 栗沢町の先史時代 昭和三十一年十一月

(註35) 河野広道・岩崎隆人・宇田川洋・本田栄作・河野本道 加茂川遺跡 アイヌ・モシリ一号 昭和四十年十二月。岩崎隆人・宇田川洋・本田栄作・河野本道 加茂川遺跡―補遺の部 アイヌ・モシリ 三号 昭和四十三年十月

(註36) 野村崇 栗山町の先史文化 昭和三十九年三月

(註37) 野村崇他 夕張川流域の先史遺跡 昭和四十二年三月

④ 恵庭市、広島町およびその周辺

恵庭市は札幌市の南東方二〇km、江別市の南方二〇kmの地点に位置しているが、本域はいわゆる石狩低地帯の中でも諸河川

が交錯した地帯で、漁狩猟に生活の基礎をおいた先住民族の生活には最も適しており隣接する江別地域とはほぼ同様に、生活条件の整った良好な地帯といえる。したがって本地域のルルマップ川、柏木川、千歳川、長都川、祝梅川、美々川、安平川といった河川の流域、または長都沼の周辺とそれに接した丘陵地帯には遺跡が広範囲に分布している。なお河川流域の低地帯の遺跡は、比較的年代の新しいものであり、段丘地帯の遺跡は年代が古い。目下判明している遺跡の数は、恵庭市、広島町および由仁町、長沼町、千歳市を合すれば、およそ百カ所を越えている。

恵庭市、広島町およびその周辺の遺跡の存在については、前述した江別市地区と同様に昭和初年から注目され、河野広道博士後藤寿一氏らによって調査が行なわれている(註38)。しかし研究者が少数だったためと、本地域に存在する遺跡は深い火山灰中に埋没している調査を妨げたので、研究は勢い江別地帯に注がれ、必ずしも本地帯の調査は渉らなかつた。昭和三十七年、恵庭市では市内に分布する遺跡の概要を知るため、大場利夫、石川徹氏に依頼して翌年並びに翌々三十九年までの三カ年にわたって調査を行った。また千歳市でも、同三十八年から同四十一年までの四カ年にわたって調査を行なった。なお、これに前後して、隣接町村でもそれぞれ調査が行なわれている。

広島町は札幌市豊平町に隣接しているが札幌地域では遺跡についての調査が最も遅れている地域であつて、目下のところ大遺跡は発見されていない。昭和三十九年に入つて後藤寿一・酒井喜重氏らが、町内に存在する遺跡の踏査を始め報告書を書いていく(註39)、それによると盛土墳墓、皆(チヤシ)、遺物包含地など六カ所を確認し、さらに同四十年には先土器文化の遺跡を発見している。なおそのほか、北広島では団地造成中に遺跡が発見され、札幌大学石附喜三男氏、田川賢蔵氏、藤本英夫氏らによつて、それぞれ調査が行なわれているが、まだ正式報告書は見られない。

夕張川南岸地域の長沼町、由仁町は、先述した栗沢町、栗山町に隣接した地域で、地勢その他の諸条件は両者まったく同様であり、遺跡の年代および構成などほとんど変りがない。長沼町内に存在する遺跡と遺物については、幌内遺跡の出土品について昭和三十四年五月斎藤征二郎氏が報告しており、幌内タンネトウ遺跡の概要については、同年札幌市西高等学校郷土研究部が報告している。また同三十七年三月に斎藤徳三郎・野村崇氏は、幌内堂林遺跡の調

第二次調査報告書 昭和四十一年十一月
(註27) 河野本道 先史時代 江別市史上巻 昭和四十五年三月
(註28) 菊地豊吉 岩見沢の先史時代 岩見沢市史 昭和三十八年八月
(註29) 大場利夫・林登美彦 北村古代史 北村村史 昭和三十四年十一月
(註30) 札幌市西高等学校郷土研究部 月形町出土の石器について 黒曜石 十号 昭和三十四年十月
(註31) 野村崇 茶志内沼から出た土器

査を行なっている。またさらに同四十二年三月に野村崇氏は、馬追丘陵で発見した土器についても報告を行なっている(註40)。

これらの知見をまとめて野村崇氏は、同三十七年九月長沼町史に「先史時代史」と題して報告しているが(註41)、それによれば、小規模ながら長沼町内には、縄文文化早期から同前期、同中期、同後期、同晩期、同縄文文化期、擦文文化期の全期間にわたる年代の遺跡が存在していると述べている(「先史文化の変遷」参照)。その後、野村崇・宇田川洋氏は昭和三十五年に発掘調査を行なった幌内堂林遺跡について、同四十三年に改めて報告している(註42)。

由仁町に存在する遺跡については、野村崇氏によれば、馬追丘陵のほぼ中央部の東斜面の、夕張川を望む標高八五mの地点で縄文文化晩期の土器を採集したことを報告している(註43)。また同氏らによって由仁町内の遺跡が踏査され、現在二十七カ所が確認されている(註44)。

恵庭市に存在する遺跡については、前述のように昭和三十七年から同三十九年までの三カ年にわたり、市内に存在する主要遺跡の調査が行われた。その結果十六カ所の遺跡が確認されたが(註45)、翌四十年には石川徹氏はさらに恵庭市に存在する擦文文化期の住居址の知見を追加し、報告を行な

っている(註46)。恵庭市に存在する遺跡は年代的には縄文文化早期から同前期、中期、後期、晩期を経て、続縄文文化期、擦文文化期におよんでいる。なお目下の調査では、先土器文化の遺跡は確認されていない。(「先史文化の変遷」参照)。しかし本地域には大規模の遺跡が多く、また未調査の地域もあるので、将来はもっと多くの遺跡が発見される可能性が多い。

地理的に恵庭市に隣接する千歳市にも、恵庭市と同様に多くの遺跡の存在が認められる。昭和三十八年から同四十一年の四カ年にわたり、市内に存在する主要遺跡の調査が行われたが(註47)、それによると千歳川流域には蘭越、千歳神社チャシ、ウサクマイ、末広高台、根志越の各遺跡。長都沼周辺には祝梅A、丸子山、キウス、極楽寺、釜加の各遺跡。長都川流域には都、長都、上長都、北信濃の各遺跡。祝梅川流域には祝梅B遺跡。美々川流域には美々貝塚。安平川流域には駒の里遺跡が分布しており、いずれも比較的大規模な遺跡が十七カ所を算えている。これらの遺跡は年代的には恵庭市などと同様に、縄文文化の早期に始まり、縄文文化の全期間と続縄文文化期、擦文文化期およびアイヌ文化期の各年代にわたっている。また美々貝塚については、松下亘氏らによって調査が行なわれ、

詳細な報告が行なわれている(註48)。なお本地域も恵庭市とまったく同様な地勢を示し、未調査の地域もあるので、将来はもっと多くの遺跡が発見される可能性が強い。

恵庭市、広島町およびその周辺に当る長沼町、由仁町、千歳市に存在する遺跡の立地条件は段丘上には縄文文化早期、前期、中期の遺跡が分布し、低地帯には縄文文化後期―晩期とそれ以降の続縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期の年代の遺跡が分布している。(「先史文化の変遷」参照)。この状態は先述した江別市、およびその周辺に存在する遺跡の立地状態と、まったく同様である。恵庭市およびその周辺で現在までに判明している遺跡の種類は、堅穴住居址、墳墓、砦(チャシ)、環状土籬、貝塚などであるが、それらのうち環状土籬、チャシに囲まれた堅穴などは、北海道の他の地域には稀な存在である。また本地域の遺跡の規模は概して大規模で、堅穴なども十数コ群在しているところも見られる。

なお本地域から発掘または採集された遺物は、恵庭市教育委員会、千歳市教育委員会では各所属の資料室、長沼町、由仁町、広島町でもそれぞれ教育委員会の管理の許に保管され、展示されている。

(註38) 後藤寿一 胆振国千歳郡恵庭村の遺跡について 考古学雑誌 二十四巻二号

昭和九年二月。河野広道 胆振国千歳村火山灰下の堅穴遺跡 人類学雑誌 四十七巻五号 昭和七年五月

(註39) 酒井喜重・後藤寿一ら 郷土研究 広島村 一号 昭和四十二年一月

(註40) 斎藤征二郎 長沼町幌内出土の土製品 黒曜石 四号 昭和三十四年五月。

札幌市西高等学校郷土研究部 長沼町幌内タンネットウ遺跡概報 郷土の科学 二十六号 昭和三十四年十二月。斎藤徳太郎・野

村崇ら 長沼町幌内堂林遺跡調査概要 郷土の文化財 一号 昭和三十七年三月。野

村崇 馬追丘陵発見の三個の土器 北海道考古学 三輯 昭和四十二年三月

(註41) 野村崇 長沼町先史時代史 長沼町史 昭和三十七年九月

(註42) 野村崇・宇田川洋 長沼町幌内堂林遺跡調査報告 昭和四十二年三月

(註43) 註40 野村崇 馬追丘陵発見の三個の土器

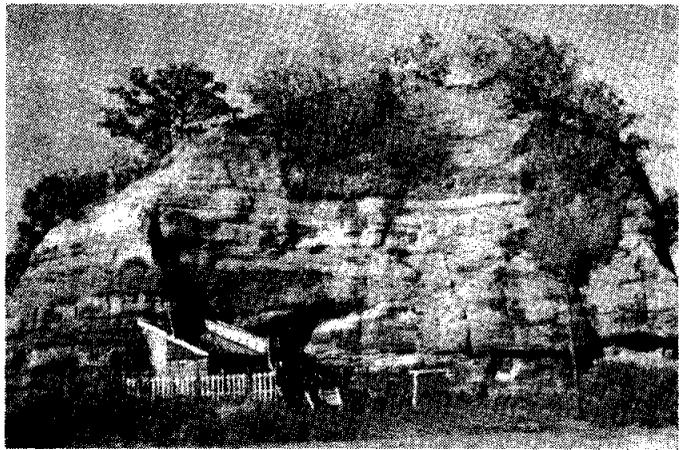
(註44) 野村崇・宇田川洋 由仁町の先史遺跡 昭和四十四年三月

(註45) 大場利夫・石川徹 恵庭遺跡 昭和四十一年七月

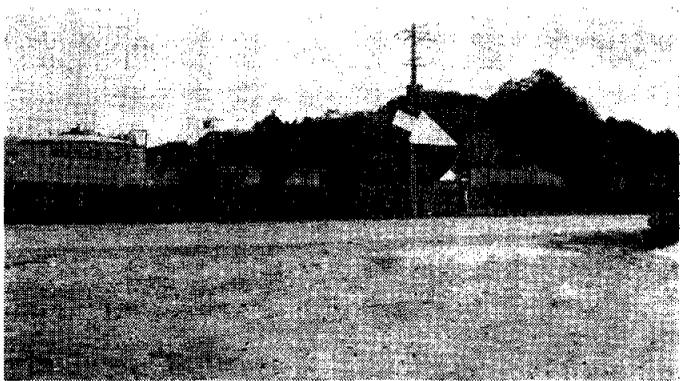
(註46) 石川徹 恵庭及び千歳に存在する擦文文化期の住居址 北海道考古学 一輯 昭和四十年二月

(註47) 大場利夫・石川徹 千歳遺跡 昭和四十二年三月

(註48) 松下亘・近堂祐弘・米村哲英・君尹彦・本田栄作・藤村久和 美々貝塚(千



余市町フゴッペ遺跡
(洞窟内部の壁面に古代彫刻が残っている)



(重要遺跡の付近に建物が立った悪例。矢印がフゴッペ洞窟)

字」といわれる岩壁彫刻、小樽
・余市付近にのみ濃厚に分布す
る巨石文化、すなわち環状列石
(ストーン・サークル)と、そ
の他の積石遺構などである。

小樽市ならびに余市町に存在
する遺跡は、北海道では最も早
く注目された遺跡である。明治
十年から同二十一年まで札幌農
学校教授として奉職したウイリ
アム・P・ブルックスが、明治
十一年小樽の手宮貝塚を発掘し
て一コの甕形土器をえている。
同年七月、北海道を旅行してい
たエドワード・S・モールスが
七月二十五日小樽に到着し、こ
この貝塚で標本を集めて札幌に
入り、ブルックス教授を訪ねて

もう一つの出来事がある。それはいわゆる
手宮の「古代文字」である。手宮洞窟の岩
壁彫刻は、慶応年間、石工長兵衛が石材を
求めて付近を試掘中に発見したと伝えられ
ているが、発見以来、内外の諸学者がこれ
を観察している。中でも明治十二年七月、
東京大学雇教師ジョン・ミルンが、手宮に
来てこれを模写して英国協会へ報告し「先
住民族の書き残したものに相違なく、支那
の古代文字に類似しているが、また人物鳥
獣の形にも似ている」と述べていることで
ある。その後明治十七年に渡邉庄三郎氏、
同二十一年に坪井正五郎博士、同四十五年
に中目覚氏、大正二年には鳥居竜蔵博士、
同四年には喜田貞吉博士らが観察を行なっ
ている。本遺跡は明治から大正年間につ
て、内外の学者が観察を行ない、おのおの
の知見を公表したことによって、学会では
有名な存在となった(註50)。年代が降って
大正末年から昭和初年にかけては、札幌存
住の研究者が再び岩壁彫刻を研究して、多
くの知見を開陳し報告している。本稿は手
宮彫刻について論ずることが目的でないの
で、大正から昭和にかけて公表された主要
な文献を参考までにあげておくにとどめる
(註51)。

教授が先に集めた資料を見て、その中に手
宮貝塚から出土した土器のあることを知っ
たが、後に刊行された「日本その日その日」
に、そのときのことを記載している(註49)。
北海道の現地で、先住民族の遺物を科学的
な視野から観察を行なったのは、ウイリア
ム・P・ブルックスとエドワード・S・モ
ールスであったことは、北海道にとっては
銘記すべきことである。
そのほか小樽市には、国際的色彩の濃い

歳遺跡別刷)昭和四十二年三月。松下亘・
武井時紀 君尹彦 美々貝塚 北海道の文
化 六号 昭和三十九年三月

⑤ 小樽市、余市町およびその周辺

小樽市は石狩湾に臨んで位置し、全市町
は積丹半島の基根部に位置しており、両者
とも日本海に北面しているが、いずれも地
理的には漁撈上、交易上の要衝と考えられ
る地域を占めている。おそら先住民族にと

っては、海産に恵まれ、一方、海路を経て
交易も行なわれた絶好な場所であったよう
に考えられる。それを証明するように、小
樽市から余市町にかけて海岸段丘上ならび
に河川の流域には、縄文文化期―続縄文文
化期、擦文文化期の遺跡が数多く分布して
いる。本地域に見られる遺跡の中には、北
海道内では類例のない種類の遺跡が存在し
ている。すなわち小樽市手宮ならびに余市
町フゴッペに存在する、いわゆる「古代文

教授が先に集めた資料を見て、その中に手
宮貝塚から出土した土器のあることを知っ
たが、後に刊行された「日本その日その日」
に、そのときのことを記載している(註49)。
北海道の現地で、先住民族の遺物を科学的
な視野から観察を行なったのは、ウイリア
ム・P・ブルックスとエドワード・S・モ
ールスであったことは、北海道にとっては
銘記すべきことである。
そのほか小樽市には、国際的色彩の濃い

手宮岩壁彫刻については、多くの研究が
見られるが、小樽市内に存在している遺跡

についての報告書も、札幌市およびその他の地域に比べればかなり多い(註52)。なお余市町に存在する遺跡についても、同様に比較的多い。昭和二十年以降、小樽市ならびに余市町に存在する遺跡は、他に類例のない種類の遺跡であることにより再び学会の注目を浴び、さらに多くの研究が重ねられていく。ここに主要なものをあげると、小樽市全域についての概要については、昭和三十三年に河野広道博士の調査報告書がある(註54)、それによると市内には八十五カ所の遺跡の存在が確認されている。そのほかでは峰山巖氏の新光寺盛土塚の発掘調査報告書(註55)、名取武光・松下亘氏の桃内遺跡発掘調査書(註56)があるが、出土遺物については畠山三郎氏の報告書(註57)などが見られる。

余市町に存在する遺跡については、昭和二十七年に佐々木敏勝氏の概要報告書(註58)がある。つづいて同三十四年には、峰山巖氏のヌッチ川遺跡発掘調査報告書、同三十七年には木村台地遺跡発掘調査報告書(註59)が見られる。またこれらの報告書に前後して、名取武光・峰山巖氏によって大川遺跡発掘調査がなされ、報告書が出されている(註60)。しばしば記述したように小樽市ならびに余市町周辺には、他の地域では見られない巨石文化の遺構、すなわち

環状列石を始め各種の積石遺構があるが、これらのうち環状列石については昭和二十四年から数年にわたって、東京大学文学部考古学研究室・駒井和愛博士を中心として調査が行なわれている(註61)。またこれとは別に河野広道博士の調査(註62)もあって、環状列石については次第に明らかになってきている。またこれとは異なった積石遺構については、昭和三十一年に名取武光氏らの調査があり、同三十八年には高倉新一郎博士、大場利夫らが調査行っている(註63)、また遺構の性格については不明なことが多い。

昭和二十五年十二月、余市町フゴッペ丸山の小丘で、まだ土中に埋没していた洞窟が発見され、その岩壁に彫刻が発見された。この彫刻が前述した小樽市手宮洞窟の壁面の、いわゆる古代文字と同種類のものであることがわかり、改めて手宮彫刻の信実性とその価値が証明される結果になった。したがって、先に手宮彫刻偽作説を称えた研究者もあつたが(註64)、本彫刻は偽作でないことが明らかにされたのである。昭和二十六年八月、名取武光氏が団長になって、フゴッペ洞窟の調査が行なわれ、多くの知見をえている。本稿はこれを論ずることが目的でないので、参考までにこれに関連した文献をあげておくにとどめる

(註65)。昭和三十三年以来、名取武光・松下亘氏らは余市郡赤井川村曲川において、先土器文化の遺跡を発見して発掘調査を行なっている(註66)、さらに松下亘氏は余市川上流においても、先土器文化の遺跡の発掘調査を行ない、報告書を公表している(註67)。

以上にあげた報告書によって、小樽市ならびに余市町、およびその周辺における遺跡について総括すれば、現在確認できる遺跡は、小樽市で約百五十カ所、余市町では約三十カ所を算えることができる。小樽、余市地帯は先述した札幌地域、石狩・手稲地域、江別地域、恵庭・広島地域では見られない岩壁彫刻、環状列石、積石遺構といった特異な遺跡が存在している注目される地域である。なお岩壁彫刻は目下のところ小樽市、余市町のほかは、本州をふくめた日本国内では発見されていない。おそらく北方大陸からの波及による文化遺産であるように考えられる。

また環状列石は小樽市、余市町の地域のほかでは、北部では音江町、南部では狩太町、函館市日吉町に分布し、本州では秋田県大湯町に分布しているが、本遺構も分布が限定されている。また積石遺構については、じゅうぶん研究がなされていないので不明のことが多い。

小樽市ならびに余市町に存在する遺構の形成年代を見ると、まず余市川上流地域には先土器文化(旧石器文化)の年代の遺跡が存在していることが確実である。その他では、縄文文化早期の年代から同前期、同中期、同後期、同晩期の遺跡が存在し、さらにそれ以降続縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期にいたる各年代の遺跡が存在している。したがって本地域には、数万年も前からアイヌ民族の年代までの、数万年間にわたって先住民が居住していたということが出来る(「先史文化の変遷」参照)。本地域に存在している遺跡の種類については前述したごとくであるが、洞窟遺跡、巨石記念物などの遺構は、精密に調査を行なえば本地域の山陵地帯、海岸地帯にまだ埋没して存在している可能性が多い。

小樽市および余市町から出土した遺物は、主として小樽市立博物館、余市町立資料館にそれぞれ保管展示されている。

(註49) E・S・モールズ 日本その日その日 大正六年。石川欣一訳 日本その日その日 昭和四年。大場利夫 モールズ先生と北海道 葦牙 七号 昭和三十年七月(註50) 大場利夫 古代文字 はまなす 八三号 昭和二十八年二月(註51) 中目覚 小樽の古代文字 大正十五年八月。寺田貞次 手宮古代文字 大正十五年八月。喜田貞吉 北海道手宮洞窟内

の彫刻について 東北文化研究 一巻六号

昭和四年。新潟武彦 北海道古代文字研究

北海道帝大新聞 昭和五年四月。五十嵐鉄

手宮古代文字の変遷 究古 二ノ一 昭和

五年一月。太田岩太郎 小樽手宮古代文字

について 北方時代 一 昭和五年十一月。

西田彰三 北海道の古代文字 北海道郷土

史研究 昭和七年六月。樋口忠次郎 手宮

古代文字について 北俱 二ノ七。後藤寿

一 後志国小樽市手宮の遺跡について 考

古学雑誌 二十八巻十二号 昭和十三年十

二月。朝枝文裕 手宮之古代文字 昭和二

十三年七月

(註52) 阿部正己 石器時代の小樽 人類

学雑誌 三十五巻八ノ十号 大正九年八ノ

十月。室谷精四郎 小樽西部の遺物遺跡

東北文化研究 一巻六号 昭和四年三月。

五十嵐鉄 小樽市及びその附近出土の石鏃

研究 究古 一ノ二 昭和五年五月

(註53) 西崎正典 畚部村出土の珍しい遺

物 究古 一ノ四 昭和五年七月。山岸礼

三北海道余市貝塚における土石器の考察

昭和九年二月。五十嵐鉄 大谷地貝塚之層

位的研究 昭和九年二月・同十年十一月。

松下亘 畚部貝塚の研究 昭和十六年三月

(註54) 河野広道 小樽附近の先史時代

小樽市史 昭和三十三年二月

(註55) 峰山巖 小樽市新光町盛土塚調査

概報 昭和三十三年三月

(註56) 名取武光・松下亘 桃内遺跡 北

月

(註57) 島山三郎 小樽市忍路町の Glans

形石器 北海道学芸大学考古学研究会連絡

紙 九号 昭和三十三年九月。同 小樽市

塩谷町の Glans 形石器 同誌二〇号 昭和

三十四年一月。同 北海道忍路出土の特異

な土製品について ウタリ 二ノ四 昭和

三十四年五月

(註58) 佐々木敏勝 余市町における先史

遺跡について よいち 二ノ十二 昭和二

十七年九月

(註59) 峰山巖 ヌッチ川遺跡 郷土研究

一号 昭和三十四年一月。同 木村台地

郷土研究 五号 昭和三十七年三月

(註60) 名取武光・峰山巖 大川遺跡 郷

土研究 四号 昭和三十六年十月

(註61) 駒井和愛 日本における巨石記念

物 考古学雑誌 三十六巻二号 昭和二十

五年七月。同三十七巻一号 昭和二十六年

一月。同三巻一号 昭和二十七年一月。同

三十八巻五六号 昭和三十八年五ノ六月。

駒井和愛 余市付近のストーン・サークル

と環状列石墓その他 余市 昭和二十八年

十一月。同 音江―北海道環状列石の研究

昭和三十四年

(註62) 河野広道 北海道のストーン・サ

ークルと環状石籬 人・民大会抄録 昭和

二十九年十月。名取武光・峰山巖 小樽市

張碓遺跡 昭和三十四年三月。島山三郎太

小樽市のストーン・サークル遺跡 昭和三十

郷土研究 七号 昭和四十年四月

(註63) 名取武光 シリバ山の積石 北海

道新聞 昭和三十一年八月七日。大崎山調

査団 余市町大崎山遺跡予備調査概要 北

海道の文化 四号 昭和三十八年九月。高

倉新一郎・大場利夫 余市町大崎山遺跡に

ついて 北方文化研究報告 二十輯 昭和

四十年十二月

(註64) 遠星北斗 疑うべきフゴツペの遺

跡 コタン 昭和五年五月。関場不二彦

手宮土壁の所謂古代文字 蝦夷往来 一号

昭和六年一月

(註65) 名取武光 北海道フゴツペ洞窟の

発掘 民族学研究 十六巻二号 昭和二十

六年九月。名取武光 フゴツペ洞窟彫刻の

意義 フゴツペ洞窟 昭和二十八年八月。名

取武光 フゴツペ洞窟の発掘 同。護雅夫

札幌地域における遺跡の保護

人間が安住できる基本的な条件として、

住居が立地上危険のないところに位置して

いること、飲み水と日光がえられ、食料も

えられることなどをあげることができるが

漁撈、狩猟に徹した古代人においては、こ

れらの諸条件を満たしうる場所として、海

湾、河口、河川の流域または海岸段丘、河

岸段丘が選ばれ、常食とする魚族、または

動物を比較的容易に捕獲できる場所が選択

フゴツペ洞窟文化と旧大陸文化 同。服部

健 フゴツペ洞窟の彫刻。名取武光・護雅

夫 フゴツペ洞窟 昭和二十八年十一月。

護雅夫 シベリヤ岩壁画とフゴツペ洞窟彫

刻 北方文化研究報告 九輯 昭和二十九

年三月。名取武光 手宮彫刻の新研究北海

道地方史研究 十三号 昭和三十年二月。

同 フゴツペ洞窟 郷土の科学 十九号

昭和三十三年一月

(註66) 名取武光・松下亘 余市郡赤井川

村曲川遺跡調査報告 一―二 北方文化研

究報告 十四輯 昭和三十四年三月。十六

輯 昭和三十六年三月

(註67) 松下亘 余市川上流における無土

器文化 ウタリ 二巻十号 昭和三十四年

十月

されたのは当然といえる。

札幌地域に存在する遺跡の分布状態を見

ると、いずこもこうした条件の満たされた

自然環境を備えていることがわかる。した

がってこうした条件の備わった場所には、

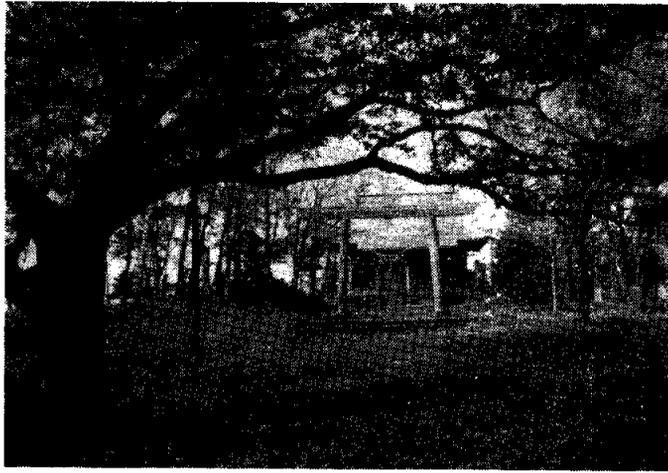
どこにも遺跡が形成され残存していると考

えなければならぬ。なお年代によつて地

理的な変遷があつたのでそれぞれの年代の

地勢を基礎にして考えなければならぬ。

札幌地域においては、縄文文化早期―前期―中期と、同後期―晩期―続縄文文化期―擦文文化期とによって、遺跡の立地条件が異なっているのは、いわゆる石狩低地帯の地勢の変遷に起因しているからである。



札幌市天神山遺跡
(神社境内のために保護されている例)

には縄文文化後期―晩期および続縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期の年代の遺跡が分布している。これは低地帯が、縄文文化後期以前は海または湿地で人間が住めず、後期以降は低地帯が陸化して、人間が住めるようになったことに起因している。

遺跡は、われわれの祖先の生活の跡である。われわれの歴史を正確に知るためには、遺跡の調査以外には手段がない。したがってわれらにとつては、かけがいのない貴重なものといえよう。しかも、先住民の遺跡は必ずしも多数残存しているというわけではないので、遺跡と確認された場合には極力これを保護すべきである。また近年、開発によって遺跡が破壊されること

が多い。中には遺跡地帯と知りながらこれを破壊して、「緊急発掘」といった名目で遺跡の破壊を正当化しようとする傾向があるが、緊急発掘は遺跡保護の本旨でないので、なるべく避けなければならない。遺跡は常に土中深く埋没して存在しているので、地上からこれを確認できない場合

が多いので、遺跡の保護はいうべくして最難事である。札幌地域では石狩、野幌大麻付近、恵庭、千歳各地域の未開拓地には、まだ多くの遺跡が存在している可能性が多い。また小樽、余市地域にも山陵、海岸線などに洞穴、巨石記念物といった特異な遺跡が埋没して存在している可能性が多い。

現在札幌地域の遺跡の中にはその学術価値が認められて、市町村または道または国の文化財として指定を受け、保護されているものもある。すなわち国指定史跡としては、手宮洞窟、フゴツペ洞窟、忍路環状列石があり、道指定史跡としては、地鎮山巨石記念物、西崎山ストーン・サークルなどがある。また未指定の遺跡でも、遺跡の重要さを予想して保護されている例としては、野幌大麻団地内遺跡、恵庭公園遺跡などがある。また神社、仏閣の敷地内であるために、かろうじて残存している例としては、千歳市千歳神社チャシ、札幌市天神山がある。なお小規模ながら昔時のままで保護されている例として、北海道大学付属植物園内に続縄文文化期の竅穴住居跡が見られる。

以上にあげた余市フゴツペ洞窟、地鎮山、西崎山、恵庭公園、千歳神社、天神社、植物園などの諸遺跡は、幸い昔のままの環境を維持し、自然との調和を保って、

先住民が生活した昔時を推察できる。

最近、遺跡保護上惜まれる例としては、余市町フゴツペ洞窟遺跡のすぐそば五百mの地点に、衛生施設組合衛生センターなる大きな建物が立てられたことである。世界的に学術価値の高い本洞窟の、自然景観を著しく損ねたことは、まことに残念といわざるをえない。なおフゴツペ洞窟のすぐそばに鉄道路線が走っており、日々の振動で壁面が脱落して彫刻が剥離しつつある。その保護対策として、国が専門家を動員して検討しているということであるが一日も早く保護措置が完成するよう願うものである。また洞窟のすぐ前に道路があるが、できればトラックなどの重量車は通さぬようにして、動揺を与えぬように注意すべきであらう。

第一章のくりかえしになるが、文化財保護条例のない市町村においては速かに条例をつくること。文化財の専任の管理者として、考古学を専攻した学芸員を採用して、遺跡の発見に努力すること。文化財に対する予算を考へること。これらの問題について当事者は真剣に考へ、そして実行すべき時期にきているように考えられる。

(北大文学部教授)